

CLIL を応用した理学療法士養成のための英語学習プログラムの検討

Plan of the English Learning Program Based on CLIL for the Physical Therapy Course

津森 伸一^{*1}, 田中 真希^{*1}, 潤子 Nichols^{*2}, 坂本 飛鳥^{*1}
Shin'ichi TSUMORI^{*1}, Maki TANAKA^{*1}, Junko NICHOLS^{*2}, Asuka SAKAMOTO^{*1}

^{*1} 聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部

^{*1}School of Rehabilitation Sciences, Seirei Christopher University

^{*2}Montmorency Primary School

Email: shinichi-t@seirei.ac.jp

あらまし： 筆者らは、理学療法士を目指す大学生が、医療現場における実用的な英語コミュニケーション能力を習得することを目標とした学習プログラムの検討を行っている。現行カリキュラムの密度等を考慮し、新規に英語科目を開設するのではなく、現在日本語で行われている授業の一部を英語で実施することを検討する。教科学習と英語学習を統合する学習の一手法として CLIL が提唱され、多くの実践がなされるようになってきた。CLIL に基づく学習プログラムにより、学習モチベーションを維持しながら、理学療法士が行う医療行為とそれに必要な英語コミュニケーション能力を同時に習得することが期待できる。本稿では、CLIL を応用した学習プログラムの提案と実施に係る課題等について議論する。

キーワード： 理学療法士養成、英語学習、CLIL

1. はじめに

日本国内に居住する外国人が増加し、医療現場においても患者の対応やコミュニケーションを英語で行う必要性が高まりつつある。それに伴い、医療従事者である理学療法士についても、今後相応の英語力が求められるようになるものと予想される。理学療法士の英語の利用場面は、病院や施設内等にほぼ限定されるものの、理学療法分野に独特の単語や表現も多く、日常会話と異なるスキルを必要とする。一方、理学療法士養成校における英語の授業は、多くが一般教養課程の開講であり、内容も日常英会話等特定のドメインに依存しないものになっていると思われる。従って、理学療法分野に特化した英語の授業を新規に開設することが望まれる。しかし、理学療法士を取得するための現行カリキュラムは既に過密なものになっており、英語科目を新設することは余り現実的ではない。

以上を鑑み、筆者らは、現在日本語で実施している理学療法分野の専門授業の一部を英語で実施することにより、理学療法分野の専門内容と医療行為に必要な英語コミュニケーション能力を同時に向上させる学習プログラムを検討している。授業の英語化は、単に授業で用いる言語を日本語から英語に変更すれば済む問題ではない。むしろ授業の英語化により、理学療法分野の学習意欲が低下するといった結果を招かないよう配慮する必要がある。

さて、近年教科学習と英語学習を統合する新しい学習方法である CLIL^[1]が提唱され、国内でも実践例^[2]が見られるようになってきた。CLIL は特にリスニング・スピーキング力を高めることを重視しており、適切な学習プログラムを構築し運用することにより、理学療法を学ぶ学生が高いモチベーションを維持し

ながら医療行為と英語のコミュニケーション能力を同時に習得することが期待できる。

以降では、CLIL を応用した学習プログラムの提案や課題について議論する。

2. CLIL とは

CLIL (Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習)は、教科内容と言語を同時に習得させることを狙った教育手法の一つであり、近年欧州を中心に広く実践されるようになってきた。類似の教育手法としてアメリカの CBI (Content-based Instruction)やカナダの immersion が知られるが、CLIL は教育効果を引き出すための技法が体系化されているところがこれらと異なると言われている。

CLIL の最大の特徴は、教材やシラバスの作成、授業実施等の活動を、4C (Content, Communication, Cognition, Culture) を有機的に結合させながら実施するところにある。例えば、医学専門用語の学習においては、用語の辞書的な知識を単に丸暗記するのではなく、用語を説明する動画を閲覧する、用語の意味や経緯を Web サイトを用いて調べる、等の活動を授業に組み込む。これらの活動により、学習モチベーションの維持、新たに取り入れた知識と既有知識の統合による言語知識(interlanguage)の生産、それによる知識の深い理解と記憶等が期待できる。

3. CLIL に基づくプログラムの検討と提案

理学療法士は、病院や施設において、身体的機能回復を行うための評価やアドバイス等を行う。このため、患者と一対一で接するだけのコミュニケーション能力が求められ、本学習プログラムにおいても、特にリスニング及びスピーキング能力の向上を図る。

以下、表 1 に具体的な教科を想定し、CLIL の実施のために必要な授業環境を議論する。

表 1 CLIL を実施する授業例

教科	理学療法評価学
教科目標	理学療法で使用する動きを表す英語を学び、活動を通して可動域訓練のスキル、方法を学ぶ
学習目標	- 各関節の運動の種類の種類と語彙が適切に使える - 測定方法を順序立てて説明できる - 命令形・丁寧語の表現が使える
学習内容	- 可動域測定の意義・方法を学ぶ - 患者に対するオリエンテーションの方法を学ぶ - 各関節の運動の種類を理解する - 各関節の名前、骨格の名前を理解する

表 1 に示すように、「理学療法評価学」の授業においては、ドメイン特有の専門用語を多数記憶する必要があるのは言うまでもない。それは辞書的な知識に止まらず、用語の表す図表や用語間の関連等、用語を知識として正確に運用できるまでのメタレベルの知識を含む。加えて、患者に対し専門的な表現を使わずに内容を説明するスキルも要求される。以上を考慮すると、「理学療法評価学」の授業については、例えば以下のような CLIL の運用が考えられる。

- (1) 専門的な用語の記憶
 - 用語を表す画像(静止画像・動画)の閲覧
 - 英語で記述された Web ページや専門書の調査
 - 専門知識を持たない人に対する用語の説明文書の作成
 - 用語に関するグループディスカッション
- (2) ロールプレイングの実践
 - 可動域訓練のシナリオ作成とプレゼンテーション
 - 学生対模擬患者によるロールプレイング
 - ロールプレイングの相互評価

一方、教員の講義を含み、15 コマの限られた時間内でこれらを実践することは容易ではない。そこで、授業外の時間に個人或いはグループの自主学習を支援するため、以下のようなソフトの開発或いは導入を検討する予定である。

- (1) 専門用語学習ソフト(アプリ)

専門用語を自学自習するためのソフト(アプリ)を開発する。辞書引きの機能だけではなく、対応する画像の表示や関連 Web サイトへのリンク、テストや自身の理解状況の表示等の機能を持たせる。
- (2) 対話学習環境

学生同士或いは学生とボランティアの外国人が遠

隔で対話学習を行う環境を整備する。具体的には、Skype や Second Life に代表されるメタバース環境を用いた学習環境を構築する。

4. 予想される課題

CLIL の導入により、可動域訓練のスキルや方法を学ぶという教科目標に加えて、外国人患者や海外の理学療法士との英語によるコミュニケーション能力の向上を期待することができる。一方、以下のような新たな課題が想定される。

(1) 前提スキルの定義と担保

CLIL は基本的に英語による授業を行うため、授業が成り立つ程度の英語の学力が必須となる。必要な英語スキルを設定し、そのレベルに達していない学生を引き上げるための方策を講じる必要がある。これには教養課程の英語教員との協力体制の確立や、自学自習用の学習環境の整備が求められよう。

(2) 英語化によるモチベーション低下に対する対策

授業の英語化により、学生の教科学習に対するモチベーションが低下するという本末転倒の結果になる恐れがある。英語を得意としない学生が積極的に参加できるよう、クイズを導入したり、難解な表現の説明に際し日本語を補助的に活用する等の工夫が必要である。

(3) 評価方法の考案

本プログラムは、調査やディスカッション、ロールプレイング等の多くの学習方法を用いるため、学力評価を多面的に実施する必要がある。これについては、授業内容を細分化し各項目の学習目標や評価基準をルーブリックとして設定する等の方策が必要である。

5. おわりに

本稿では、CLIL に基づき理学療法課程の教科学習と英語学習を同時に行う学習プログラムについて議論した。理学療法課程の授業は、視覚教材が多用される、演習や実習を含むものが多い、等の理由から CLIL の適用が比較的向くものと思われる。一方、CLIL は世界各国で広く実践されているものの、日本国内における実践例は少ないため、種々の方法を試しながらノウハウを蓄積する必要がある。

今後は、授業シナリオをより具体化すると共に、個人学習用ソフトや協調学習環境の整備を行い、少人数のグループによる実践や評価を行う予定である。

参考文献

- (1) Do Coyle, Philip Hood, David Marsh: “CLIL: Content and Language Integrated Learning”, Cambridge University Press (2010)
- (2) 渡部良典, 池田真, 和泉伸一: “CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法”, 上智大学出版 (2012)